Jul. 20, 1989, no. 6−10, Tl); Mt. Ishizuchiyama 1900m (H. Ishikawa, Sept. 4, 1990, no. 18−20, Tl).

アカイシミツバツツジ

(東京大学理学部附属植物園)

四国のカンサイガタコモウセンゴケ(中村俊之[a], 久米 修[b], 角野康郎[c])

Toshiyuki Nakamura, Osamu Kume and Yasuro Kadono : *Drosera spathulata* Labill. subsp. *tokaiensis* Komiya in Shikoku, Japan

カンサイガタコモウセンゴケ *Drosera spathulata* Labill. subsp. *tokaiensis* Komiya は，狭義のコモウセンゴケ subsp. *spathulata*が葉身と葉柄の区別が明瞭でないヘラ形の葉をもつのに対し，葉柄が明らかであることなどで識別できる．コモウセンゴケの染色体数が2n＝40（4倍体）であるのに対し，カンサイガタコモウセンゴケは2n＝60(6倍体)であり（Kondo 1969, 1973)，またその分布も東海地方から近畿地方にかけた一帯に集中しているため，Komiya & Shibata (1978)はこれを新亜種として記載した．外部形態や染色体のさらに詳細な研究（中村，植田，投稿中）からも，カンサイガタコモウセンゴケを独立した分類群として扱うことは妥当と考える．最近，植田(1989) は東海地方の湿地に分布する植物群を検討し，カンサイガタコモウセンゴケを東海丘陵要素の一員とみなしている． ところがこのほど，四国にもカンサイガタコモウセンゴケが産することが判明した．①香川県三豊郡財田町の1箇所，②同綾歌郡綾歌町の2箇所，合計3箇所から採集されたもので，外部形態ばかりでなく染色体数が2n＝60であることも確認のうえ，カンサイガタコモウセンゴケと同定した．①の産地は山沿いの小さなため池の土堤の下部で湧水があり，周辺にはモウセンゴケやイシモチソウも生育していた．②の産地のうちの1箇所は山腹に開けた湧水湿地で，ヌマガヤ，コバノトンボソウ，カキラン，トキソウ，モウセンゴケなどが見られる場所である．もう1箇所は，上記の湿地に近い山道沿いに生育していたものである．

この新産地の発見によって，東海丘陵要素植物群の成立過程を考える上でさらに興味深い事例が見つかったことになるが，今回の新産地も既知産地同様に段丘堆積物上の湧水湿地であることは注目に値しよう．

なお，証拠標本（久米1240, 1248, 1249）は神戸大学教養部生物学教室に保管してある．

末筆ながら今回の調査に御協力いただいた香川植物の会会員の皆様，並びに本稿をまとめるにあたって御意見をいただいた大阪府立大学植田邦彦博士に御礼を申し上げる．

引用文献

Komiya S. and Shibata C. 1978. Distribution of Droseraceae in Japan. Bull. Nippon Dental Univ., Gen. Educ. (7) : 169−205.

Kondo, K. 1969. Chromosome numbers of carnivorous plants. Bull. Torrey Bot. Club **96** : 322−328.

――― 1973. Chromosome numbers of some *Drosera* taxa. Journ. Jap. Bot. **48** : 193−198.

植田邦彦 1989. 東海丘陵要素の植物地理 I. 定義. 植物分類地理 **40** : 190−202.

([a]神戸大学理学部生物学教室，[b]香川県東部林業事務所，[c]神戸大学教養部生物学教室)